

第 27 期第 8 回仙台市図書館協議会会議録

- ◎ 会議の日時・場所 平成 27 年 11 月 17 日（木）10 時 00 分～11 時 30 分
仙台市役所本庁舎 2 階第 4 委員会室
- ◎ 出席委員の氏名 石川俊樹委員、遠藤仁委員、小岩孝子委員、今野広元委員、
坂田邦子委員、高橋隆子委員、高橋順子委員、中山聖子委員、
横山祐子委員、渡辺通子委員
- ◎ 事務局職員氏名 市民図書館長 村上佳子、市民図書館副館長 高橋泰、
若林図書館長 岡崎修子、太白図書館長 福井健司、
泉図書館長 石垣伸樹、広瀬図書館長 高坂節子、
榴岡図書館長 中里省一、
市民図書館企画運営係長 佐竹幸成、
市民図書館奉仕整理係長 山田千恵美、
市民図書館企画運営係主査 松原佐重子、冨田直美

◎ 会議の概要

1 開 会

2 会長挨拶

市民図書館長挨拶

3 議長の選出

仙台市図書館条例施行規則第 14 条第 3 項に基づき、遠藤仁会長が議長となった。

4 会議録署名委員指名

会長より、高橋順子委員を指名。

5 報告事項

(1) 平成 27 年度若林図書館、広瀬図書館及び榴岡図書館の運営状況について

市民図書館副館長より、資料 1 に基づき説明。

[委員からの主な質問・意見]

議長

評価の基準に基づき評価しているのか。

事務局

その通りである。

(2) 平成 28 年度仙台市図書館要覧について

市民図書館副館長より、資料 2 に基づき説明。

[委員からの主な質問・意見]

特になし

6 協議事項

(1) 「仙台市図書館振興計画（第二次）」中間案について

市民図書館館長及び副館長より、中間案及び資料3に基づき説明。

[委員からの主な質問・意見]

議長

市民センター等へのサービススポット設置については先日、河北新報でも取り上げられ、期待されていると見ている。新たに作成したYAページは良い内容と評価しているが、アクセス数は調査しているか。

事務局

評判はよいが、仕組み上、アクセス数は確認できていない。可能な範囲で確認したい。図書館のホームページ自体は仙台市のホームページの中でもアクセス数の高い方だと聞いている。

議長

学校を通してという訳にはいかないだろうが、多くの若い世代にYAページの情報が伝わるとよい。

事務局

先日開催されたPTAのイベントで、パネル展示とチラシ配布でPRした。スマートフォンでも見やすいページとなっている。

事務局

パブリックコメントの番号1から3は図書館の電子化に関する提案。このうち番号3は、図書館への電子書籍の導入には参考資料に記載のように問題もあることから、学校と一緒に教育の面から取り組むことについて提案をいただいている。委員には学校関係者も多いので、どのような取り組みが可能かについて意見をいただきたい。

議長

ICT活用を進めている学校教育と図書館が連携して電子書籍導入を進めるという提案だと思うが、教育現場での優先順位としては、まず紙媒体でしっかり学習をした上でのICT活用と考えるがどうか。

高橋順子委員

電子媒体ということでは、中学生の状況で一番気になっているのがスマートフォンの使用。少し前には高校入学時に買ってもらうことが多かったのが、現在は中学入学時には半数が所持。就学前の幼児の子守に使用する状況も増えていると聞く。手元にスマートフォンがあれば依存症かどうか分からないが、隠れた依存症はどれくらいいるか懸念している。中学ではもう遅く、就学前の早い段階から紙媒体の図書に触れる取り組みが、今後ますます重要になってくると考えている。中学生には紙媒体が優先と感じている。

議長

大学生も紙の辞書ではなくスマートフォンで検索するようになり、紙の辞書を引かせる努力をしているところ。情報を専門とする人は情報化の進展を求めるだろうが、小学生が紙の教科書の代わりにタブレットに入れた電子教科書を持って通学する状況になっていないのにはそれなりの理由がある筈と思うがどうか。

高橋隆子委員

スマートフォンの保有率は学校や地域により違うが、おそらく半数以上である。学校に持参したり使用することはないがスマートフォンを保有する児童が多くなっている。学校では、防犯上の観点から、社会学級やPTAの親子教室等で専門家によるスマートフォンの使い方講座を開催し学習させている。「子ども読書活動推進計画」を見ると、学校でも電子書籍をということになるのだろうが、まずは本をしっかり読ませたい。昨年度開催された図書館の研究大会の講師である辞書の編纂者によると、今の大学生は五十音順が分からないとのことだったが、電子辞書の影響が大きいと思う。電子辞書を引けば答えが現れるが、その前に小学校では紙の辞書を引かせ、紙媒体の本で文字を読ませたい。インターネットで調べれば答えが出るので、それを丸写しして分かったつもりになっているが、何が書かれているかを読み取るためにも、まずは本に触れさせたい。

高橋順子委員

便利なものは教育にマイナスの影響があると感じる。少し前までは、小学校卒業時に子供会から贈られた英語の辞書を持って中学に入学という流れがあったが、電子辞書が出てから無くなった。そのためうやむやになってきた中学での辞書指導について見直しがかかっているところ。電子辞書は一語一対応で、言葉の広がりにつながらない。一つの単語の背後にある多くの言葉や使い方への想像力が働かない。学校教育の中での電子機器の使い方は慎重に扱わないと、子ども達の視野や世界を狭めてしまう。

議長

学校教育の中で、時代の流れの中で当然に電子化の流れはあるにしても、質的なことを問題にしなければならないので、その辺を加減しながら指導にあたっている。パブリックコメントの意見の趣旨は分からないではないが、時と場合による。

坂田邦子委員

大局的な流れを見れば、このような意見は当然出てくるものと思う。情報専門の研究科に所属しているが、自身はアナログ的な生活を送っており、紙媒体の本も読む。アナログの良さも理解しつつ、専門家からICT教育の良さを聞くと納得するところもある。持ち運びや省スペース等の物理的な面だけでなく、本ではたどり着けないところにたどり着けたり、想像力を膨らませることもできる。ICT教育だけを教育の中で推し進めるというのではなく、アナログとデジタルそれぞれの良さをミックスし、良いところを取り上げながら使いこなすという方向性だと理解している。アナログは基本的に大事だが、社会がデジタルの方向に進んでいるため、このような意見も出るので、それに対してどう対応するかという行政側の立場を明確に示さなければならないのではないか。中間案に該当するような施策が掲載されているが、検討という表現

では足りず、さらに具体的な記述を求めるものである。学校と連携してやっていくという方向性を打ち出すということもあり得ると思うが、タブレットの使用に慣れた大人もおり、歩いて本を借りに行けなかったり、目が不自由な方向への録音図書等のデジタルデータでの貸出を、ユニバーサルサービスの視点で考えていく必要もあると思う。このような意見は今後も多くなると思う。

石川俊樹委員

高校の状況も小学校・中学校と同様である。ICTは実生活で先行し、教育は後追いの形で、使い方や派生する問題への対応が後手に回っている。紙媒体の資料と情報機器を併用して課題解決できるのが理想だが、なかなかそこまで行けない。既に生活の場にICTが入ってきており、ICT抜きには情報を得られない部分も出てきているのが実際であり、中間案に掲載のあるハイブリッド図書館やレファレンスのハイブリッド化のように両睨みでいかざるを得ない状況にあるが、ややもすると新たなものに偏りがちになることは警戒しバランス感覚を維持していくことと、それらを子ども達にもいかに伝えていくかという視点も持ち続ける必要がある。

渡辺通子委員

現実問題としてデジタルネイティブが着実に育ってきており、どういう形やスピードになるかは別としてデジタル化は進めていく必要がある。仙台市図書館としては、蔵書のデジタル化とシステムのデジタル化の2つの方向性がある。

議長

世の中の情報化が進展し、図書館の高機能化の方向にも進める必要もある。意見では、図書館と学校との連携と直接的に結び付けられているが、情報化により得るものだけでなく失うものもあることにも気を付けながら、お互い模索しながら妥協点を探っていく必要がある。図書館として思想を持たなければならない時代になってきていると感じた。この意見を中間案に取り入れるのは難しく、簡単には結論がでない問題なので、今後とも課題として検討していくしかないかと思う。

高橋順子委員

電子書籍については光刺激の問題も気になる。寝る前に強い刺激を目から入れることによる睡眠障害や、遅くまで電子機器を使うことで昼夜逆転の子どもが増えている。大人とは違うので、生活習慣や健康面に与える影響がないかという点でも、進める上では慎重になっているところである。

議長

情報化の話題は校長会で出ることあるか。

高橋順子委員

なくはないが、今のところ大きくは取り上げられてはいない。

石川俊樹委員

番号5の意見について、県立図書館に携わる中でも重要性を感じている問題である。対人面で前面に立つカウンター職員が、いかに利用者の要望を受け止め応えられるかが重要で、うまくコミュニケーションがとれないとクレームに発展する。じっくり話

を聞けば理解し満足してもらえる。最初の段階で利用者のニーズをおさえられるのだが、必ずしも目的や目標が明確に整理されている人ばかりではないので、微妙な言葉のニュアンスや表情等も見ながら対話しつつ求めることを探っていくには、経験も大事だが、研修等も必要。カウンター業務は本の出し入れも含め単純作業と思われがちだが、レファレンスに限らず資料の貸出や返却の受付時の対応も、人間ならではのやり取りがあるし、携わる職員のスキルアップの重要性を感じている。そういう意味で大事な意見だと捉えている。

事務局

職員のスキルとして、選書の技術や専門知識といった点を取り上げていたが、コミュニケーション能力について盛り込むことも必要と考えている。

横山祐子委員

番号4の意見に関連し、小学校の図書館での経験だが、担当教員が図書館での活動の時間を作ってくれるクラスの児童は、調べ学習でまず何を調べるか、図書館内でその本がどこにあるかが分かり、教師が興味を持たず年に一度の図書館活動しかないクラスの児童とは歴然とした差がある。授業参観も、電子機器を使用しデジタル教科書ですと子どもも喜ぶし授業も映えるということで若い教員は飛びつくし、教科書を持ってこない子どもも出てきているという話も聞く。図書館では郷土に関するパステインダーも作成・提供しているので、調べ学習等での図書館利用について、国語科だけではなく、教科外の研究会の際に図書館側から教員に対し話ができるとうい。

中山聖子委員

若者の活字離れの話の中で気になるのは、そもそも調べたいという欲求が無い子ども達に対して、色々なものをメニューとして提供しても行動につながらない。知らなくとも気にならないというのが今の子供の世代で、知らない言葉があってもスルーできてしまう。計画に盛り込むのは難しいが、何かを知りたい、調べたい、聞いてみたいという欲求が生まれる環境とセットにしていかないと、制度やシステムを整えても使われなし、大学や社会人になっても生かされないと感じている。

事務局

図書館はどちらかというと、読みたい、知りたいに応えるという立場で進めてきた。

議長

芽を作っていく方向性も必要ということか。

小岩孝子委員

児童館をやっているので、0歳児からなるべく本に触れる機会を大切にしている。ある企業では紙の文書を保存せず、データで保存し情報として処理するという話を聞いて驚いた。事務処理・情報処理としてはいいかもしれないが、感情や人との触れ合いが少なくなっていくのではと心配。本をめくることにより、言葉の意味合いを知り、改めてめくることで別な感情が生まれたりなど、紙だからこそ伝わるように思う。幼少時から高校生くらいまでは、紙媒体に触れることをさらに進めていかなければいけないと思っている。

議長

子どもはお話が好きで興味関心が旺盛と思ってきたが、最近の子どもも同様か。

小岩孝子委員

好きである。紙に触れて自分でめくりながら他の子どもと話しているのを聞くと、電子機器では得られないものがたくさんあるように感じる。

議長

どこから生涯の読書活動につながらず、断絶が生まれるのか。

横山祐子委員

小学4年生くらいでも、読み聞かせで読んでもらうのは好きでも、一人読みに移行しない。特に文字が多かったり小さかったりすると読まない。1～2年生くらいで、読んでもらうことから一人読みに移行する時期が大事だと考えている。5～6年生でも読んでもらうことは好き。文字を習って自分で読むようになるその時期に、幼年童話などでうまく移行してあげなければいけないと思っている。

小岩孝子委員

児童館では、読み聞かせの時間だけでなく自分で読む時間もとっている。学校でも取り組んでいると思うし、機会を設けて色んな所で積み重ねていければよい。図書館も大きな役割を担っている。

議長

読書活動のつながりを切らずに推進するにはどうしたらよいか。

高橋隆子委員

先日行われた図書館教育の研究授業の中で、自分の読んだ本の中でいちばんお気に入りの場所を紹介するという場面があった。本をめくり指差して見せる子ども達の顔は生き生きしていて、本を持つことの喜びを感じる授業であった。電子書籍で同じことが可能だろうかと考えさせられた。

渡辺通子委員

自分自身も紙をめくるのは好きで、活字を読む楽しさも味わってきたが、「紙が生まれたから活字ができ多くの人が読めるようになったが、紙が無い時代はどうしていたか。それくらい新しい時代の変革を迎えている」と先生方や学生に説明している。紙ベースのツールから、電子媒体のツールに変わるという移り変わりの時期に来ている。電車の中で、若いお父さんが小さな赤ちゃんに画面を見せ、赤ちゃんが食い入るように見ているのをみて、新しい時代が来ていると感じた。それほど大きな百年に一度というような変わり目で、私たちはどう橋渡ししていくかということも必要なのではないかと伝えている。

事務局

パブリックコメントの意見で多かったのは12ページの「情報化社会の進展に合った情報提供の充実」だが、この項目については、インターネット環境の整備や入手困難な郷土資料の電子化等の施策をあげている。番号2の意見にあるように、市民との協働による郷土資料の電子化等、取り組みの方法論については新たな示唆も得たが、項

目としては既に盛り込まれている。また、先ほどハイブリッドの話も出たが、文字活字文化を大事にし、情報を知り、それを提供していくということも盛り込んでいる。ここにさらに付け加える表現をどうすべきか、どう踏み込んで書けるかについて考えているところ。19 ページの学校連携には電子化の視点はなく、学校と図書館とが本を通してつながり、図書館資料をより広く活用してもらおうという観点で記載しているが、ここに学校現場の電子化について盛り込むのは難しいと感じている。本日の議論を踏まえても、学校連携の項目ではなく、12 ページに関する意見として盛り込むことでのいかんと思う。

議長

価値ある情報が何か判断するのが難しい時代となってきた。青空文庫についても意見が出てきたが、やはりきちんとしたテキストに触れなければ名作を読んだことにならないと考えている。情報が電子化されて流通する時代になり、信頼できる情報は何かということが判断できない子どもにとってはやっかいな時代になったと感じている。教育する側が選別して考えていかなければならない問題である。

パブリックコメントの意見に加え、本日の協議会の意見も可能な限り取り入れてまとめてもらいたい。

7 その他

(1) 意見箱の常設について

市民図書館長より説明。

(2) 博物館連携事業、郷土のかぜ、パスファインダーについて

市民図書館長より、資料に基づき説明。

(3) 仙台市子ども読書活動推進計画（中間案）について

生涯学習課企画係長より、資料に基づき説明。

8 閉会